

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（C） 機関番号：14602  
 研究期間：2010-2012  
 課題番号：22520792  
 研究課題名（和文） グローバル化と地域景観・地域環境の変容・保全—紀伊半島の近現代に着目して  
 研究課題名（英文） Relationship between the globalization and the conservation of regional landscape and environment during the modern and present time in the Kii Peninsula, western Japan.  
 研究代表者  
 松本 博之（MATSUMOTO HIROYUKI）  
 奈良女子大学・名誉教授  
 研究者番号：70116979

### 研究成果の概要（和文）：

本研究では、グローバル化と地域景観・地域環境の変容について、特に紀伊半島における近現代を中心に検討した。その結果以下の諸点があきらかとなった。（1）1960年代後半からの外材供給の増大にともなう国内材供給量の低下は、十津川流域における植林地の変化に大きな影響を及ぼし、植林地伐採後の落葉広葉二次林景観の出現をもたらしている。（2）生活基盤が脆弱な紀伊半島和歌山県沿岸部では、近代を通じてグローバル化の2度の波があることが明らかとなった。このうち2度目は最近10年ほどの動きであり、明治期以降第2次大戦前までの1度目のグローバル化を基盤とした歴史的な地域性を引き継いでいる。（3）経済的な面でグローバル化の進行が顕著な日本社会ではあるが、高齢者個々の「生きられた世界」の構築には、地理的要素や地域の特殊性といった地域間の差異が大きく影響している。

### 研究成果の概要（英文）：

This project analyses the modern changes of regional landscape and environment in the Kii peninsula, Japan. It provides the following results: (1) the secondary growth of the deciduous and broadleaf trees is remarkable in the basin of the Totsugawa river because of not making artificial reforestation affected by the timber import from foreign countries after the World war II. (2) the recent socio-cultural movements of globalization (the international exchanges) are brought about on the bases of emigrations to foreign countries from Meiji era to the world war II. (3) everyday lives and life histories of old generations are subject to the regional differentiations under the globalization.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：地域景観、地域環境、紀伊半島、グローバル化、保全

### 1. 研究開始当初の背景

最近の地理学的研究、とくに人文地理学的

研究では、社会情勢の急速な変化もあって、ミクロな地域の短期的現象・変化とそれに関

わる対処療法を求めた試みが多い。このような研究では、ディシプリン間の壁も薄くなり、地理学そのものの存在理由も影が薄くなる観がある。しかしながら地理学は、メソスケールやマクロスケール、および中長期的な時間スケールを念頭におきながら、研究対象地域や研究対象事象を扱うことに豊富な経験を有するディシプリンである。とくに、自然現象との関係性に深く立ち入って人文現象を考察しようとしたり、地理学の自然的側面と人文的側面が相互に協力して力を発揮しようとする場合には、メソスケールで中長期的な視点は欠かせない。地理学の強み、ないしレゾナードルの一つはそこにある。

一方、欧米の地理学の潮流をみると、1980年代からの文化論的転回以後、文化地理学はその研究対象を人間による想像力や表象に力点を移してきた。その結果、社会的構築主義やコスグローブらの景観論に見られるように、社会過程にのみ注目し、自然的・人工的環境構成要素は人間の側から一方的に意味づけされるものとして捉えられてきた。しかし近年では、ディシプリンとしての地理学における自然と人文の二元性が問い直され、ANT 理論や非表象論を核としながら、そのフロンティアが模索されている。それらの議論では、人間はある特定の場所や空間において環境を一方的にコントロールしているのではなく、環境構成要素の側から人間に働きかける相互作用も働いている、という見方が強くなっており、今また、日常生活における景観と環境の物質性の持つ意味が改めて問い直されているのである。こうした研究動向については、わが国の地理学では一部の研究者が、部分的に示唆しているに過ぎず、とくに隣接科学との境界領域にある環境論や景観論の議論に対して地理学の側から情報発信するためには、物質性を重視した新たな展望を拓き、深める必要がある。

研究代表者は 1989 年に文化地理学の環境論に関するレビューを手がけて以来、人間—環境系に関心を持ち続けてきた。なかでも、日常生活における住民の自然環境認識や環境利用にともなう海洋資源管理の問題、更には近代都市環境下の日常生活における身体性との関係などに焦点を当てた研究を進めてきた。この過程で、人間が関わる環境構成要素の意味は、社会構築主義的主張にみられる、人間の側からの意味づけや価値づけにのみ解消しえず、人間の身体性を媒介としながら、自然的・人工的環境構成要素の側からの働きかけが無視できないことに気づくようになった。そこでまず、平成 16~18 年度科研費「奈良盆地における景観の再評価に関する基礎的研究」で、自然・人文景観の個別要素の特徴を通時的に明らかにすべく、時代間の比較や発達史的な検討を加え、それらの

特徴・実態をかなり解明することができた。しかしながらこの研究では、検討要因が複雑で多岐にわたり、自然的・人工的環境構成要素の側からの働きかけの解明などを十分行うまでには至らなかった。そこで平成 19~20 年度科研費「奈良盆地およびその周辺域の景観と環境の保全に関する基礎的研究」では、新たに、景観・環境の保全とその物質性という観点を加えつつ、それを社会過程に組み込むことによって、より動的な検討を試みた。景観や環境の保全は、「文化財保護法で保護すべき自然的・文化的景観の選定」といった社会的要請に資するにとどまらず、それらを 1 つの社会過程として組み込み、人と環境構成要素との相互関係性を究明し、地域の多様性を研究する地理学の根幹に資する研究テーマと捉えている。

## 2. 研究の目的

本申請研究課題では、古くから人と自然の持続的な関係性を維持してきた、日本で最も大きい半島である紀伊半島地域を対象としながら、近現代という 1 世紀ほどの時間スケールを設定することで、改めて自然系—人文系の接点を求めたメソスケール地理学研究の潜在力を開発することを志向した。具体的には、

- i) 地域社会に与えるダム開発の功罪
- ii) 獣害問題を含めた動植物の生態的变化や山岳環境の変化と景観・環境保全
- iii) 土砂災害や地震・津波災害など、災害履歴と地域景観・地域環境の変容過程
- iv) 狭小な臨海平野における人間の営みと地域景観・地域環境の変容過程
- v) 山村の民俗・文化と環境利用・環境保全の実態

などを明らかにすることを目指した。さらには、前述の各調査研究項目の個別的検討だけではなく、各項目相互の関係性も意識しながら、あるまとまりを有する地域の総合的な景観・環境保全について考えることを試みた。

## 3. 研究の方法

本研究では、具体的な調査地を、A) 熊野川(十津川)流域とその周辺、B) 新宮~串本~田辺・白浜を中心とする紀伊半島南部沿岸地域、という 2 つに設

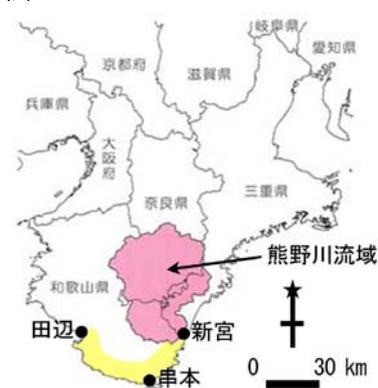


図1 調査地域位置図

定して調査研究を進めた（図1参照）。すなわち、前述のi)～v)の検討事項に関連する基礎資料として、地形図・空中写真・衛星画像の選定購入を行い、それらを素材として、地形・植生をはじめ宅地・耕地など、調査地域の土地利用状況の変化や関連する景観・環境の変化を基礎資料化した。

次に、地域住民の認知環境に関する基礎資料とするために、地方地誌など関連基礎資料の収集を行った。そして、とくに景観・環境の物質的要素、伝統的あるいは創出された民俗行事、住民の環境認識、などが、地域社会の維持活動にどのような積極的役割を果たしているか、物質的側面と住民の実践的な社会過程がいかに関係しているか、ひいてはそれが景観や環境の保全にいかに関連しているかなどについて検討した。また、この過程では、2011年9月に当該地域を襲った台風による災害と関連して、災害履歴と地域環境の変化とがどのような関係性を有しているか、住民の認識という視点も含めながら、検討した。

供給に対応して、国内材の供給量が減少してゆくことに呼応した現象が、十津川流域の植林地にも色濃く反映し、現在まで継続していることを示しているものと考えられる。なお、このような植林地を中心とする植生の変化は、表1に示したような、十津川流域の電源開発に伴うダム建設の進んだ時代と歩調を一にしている。

## （2）和歌山県における第二の「国際化」の特性—臨海狭小平野部の展開（図3）

近代の紀伊半島ないし和歌山県沿岸部の地域性に根差したグローバル化を社会・文化的側面から検討した結果、当地域では近代を通じてグローバル化の2度の波があることが明らかとなった。このうち、2度目は最近10年ほどの動きであり、明治期以降第2次大戦前までの1度目のグローバル化を基盤とした歴史的な地域性を引き継ぐものである。その実態は、以下のとおりである。

近年の動向はいわゆる国際交流と言われるものであるが、和歌山県の場合、その基盤

## 4. 研究成果

### （1）十津川流域における土地利用の変遷—とくに植林地とダムについて—

環境庁（省）による自然環境保全基礎調査の第3回（昭和58～61年度）植生調査（図2）と第6・7回（平成11～16年度、一部平成17年度以降）調査について比較検討した。その結果、第3回時に伐跡群落だったエリアの約60%が落葉広葉樹二次林に、約30%が植林地となっていた。第3回調査時の伐跡群落は、おおそ植林地の伐採地を指標していると考えられるので、2/3程度の伐採地では、伐採後に再度、植林を継続することがなかったものとみられる。これは、輸入自由化によって1960年代後半から急増する安価な外材の

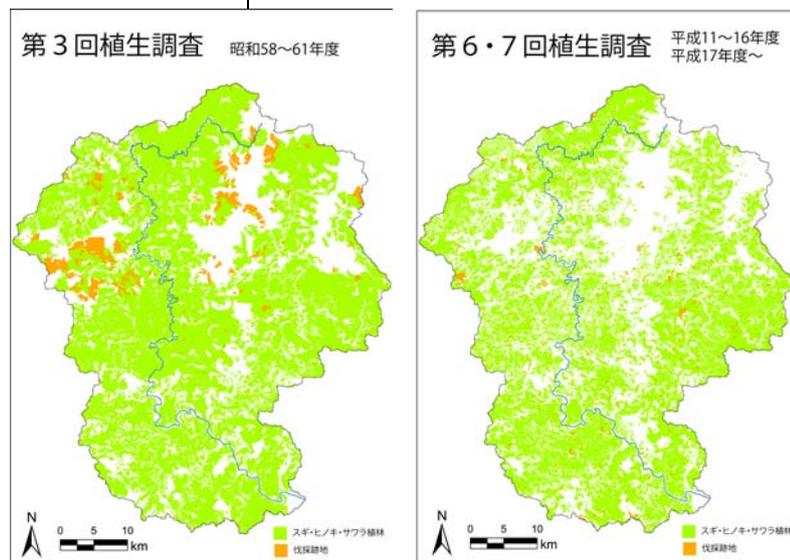


図2 十津川流域の植生植生と伐跡群落（自然環境保全基礎調査より）

ダム名	河川名	形式	目的	堤高(m)	堤頂長(m)	堤体積(m <sup>3</sup> )	総貯水量(m <sup>3</sup> )	竣工年(西暦)	所在地
二津野	十津川	アーチダム	発電	78.0	210.6	120	43,000	1962-04-01	奈良県吉野郡十津川村桑畑
小森	北山川	重力式コンクリートダム	発電	34.0	154.0	52	9,700	1965-04-01	三重県南牟婁郡紀和町大字小森和田の下 和歌山県東牟婁郡北山村大字下尾井宇西の峯
七色	北山川	重力式アーチダム	発電	61.0	200.8	157	61,300	1965-04-01	三重県熊野市神川町神上 和歌山県東牟婁郡北山村七色
風壁	十津川	重力式コンクリートダム	発電	101.0	329.5	592	130,000	1960-04-01	奈良県吉野郡十津川村野尻
池原	北山川	アーチダム	発電	111.0	460.0	647	338,400	1964-04-01	奈良県吉野郡下北山村上池
坂本	東ノ川	アーチダム	発電	103.0	256.3	183	87,000	1962-04-01	奈良県吉野郡上北山村小椋
旭	旭川	アーチダム	発電	86.1	199.4	147	16,920	1978-04-01	奈良県吉野郡十津川村旭宇中山下
瀬戸	瀬戸谷川	ロックフィルダム	発電	110.5	342.8	3740	16,850	1978-04-01	奈良県吉野郡十津川村旭宇瀬戸
猿谷	十津川	重力式コンクリートダム	不特定用水 河川維持用水および発電	74.0	170.0	174	23,300	1957-04-01	奈良県吉野郡大塔村大字辻堂大和田
九尾	天の川	重力式コンクリートダム	発電	26.5	98.2	12	1,137	1937-04-01	奈良県吉野郡天川村大字九尾宇横杉山
川追	天の川	重力式コンクリートダム	発電	36.5	104.0	40	1,113	1940-04-01	奈良県吉野郡天川村大字北角宇塩坪

をなすのが明治期以来沿岸地域からの海外出稼ぎおよび移民の地域史である。狭小な河谷平野、地震・津波、それと台風をはじめとした度重なる暴風雨の襲来、動力船による沖合漁業の展開に伴った地元地曳網の疲弊など、生活基盤の脆弱性のために、和歌山県、とくに沿岸部は熊本・広島・長崎・沖縄とならぶ日本の代表的な移民県であった。当時の新興諸国南北アメリカとオーストラリアを中心とした地域への人々の流動であったが、カナダ・フレーザー河でのサケ漁と缶詰加工、ヴァンクーヴァー海峡でのニシン漁と塩漬け加工、ハワイのホノルルおよびカリフォルニアのサンピードロでのイワシ・マグロ・カツオ漁と缶詰加工、一方オーストラリア北部熱帯海域木曜島・ブルーム・ダーウィンを基地とした真珠貝採取業など、和歌山沿岸域での海の生活経験を活かした職種への就業が特色である。沿岸地域の各村を母体にした個人的連鎖的移動による出稼ぎないし移民であったが、第2次世界大戦の勃発は人の移動を中断させ、アメリカ合衆国およびカナダでは強制収容および戦後移民者たちは分散し、移住地での元の母村を基盤としたコミュニティや母村との交流は打撃を受けた。

戦後、日本国内および海外移住地の双方において、生活の立て直しのために、こうした出稼ぎないし移民の事柄は当該地で亡くなった者の遺族（家族）や関係者の私的なものとして表面化することはなく、国内外において当該世代の消失にともなって次第に相互交流は衰退化の傾向を示してきた。しかし、移住地にあつては、二世、時には三世を含みこんで南北アメリカの主要都市に本部を有する和歌山県人会として再組織化され、南米のブラジル・パラグアイ・アルゼンチン・ペルーをはじめ、カナダに3つ、アメリカに3つなど、現在12の県人会がある。オーストラリアでは、戦後日本人の大半が強制送還されたために再組織化を行う基盤を有しなかったが、戦前の真珠貝漁業の主要な出稼ぎ地ブルーム・木曜島との間では、太地・串本のような送り出し地域と姉妹都市提携が結ばれるようになった。こうした基盤を梃子にし

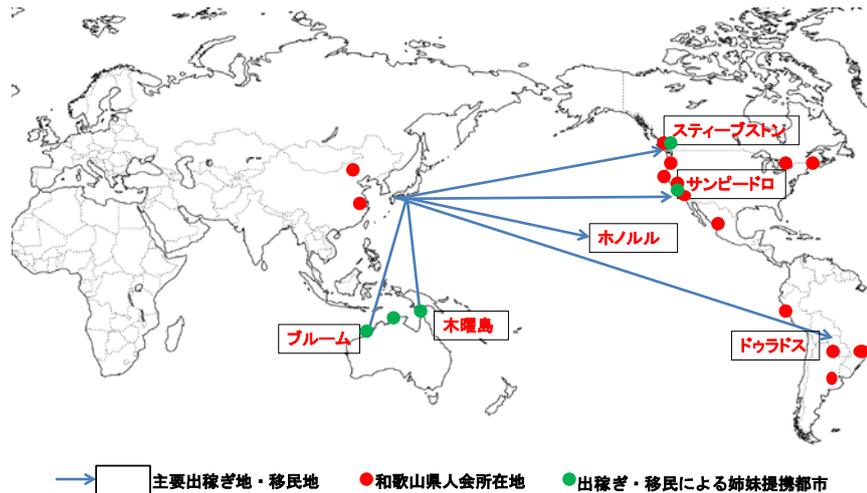


図3 グローバル化と和歌山県の国際性 (平成24年4月1日現在)

ながら、国際交流という掛け声の下、和歌山県において2004年のユネスコ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」指定を契機に、観光事業の活性化もふくめ、戦前出稼ぎ者や移民の送り出し地域、つまりその母村という来歴を重要な地域史ないし「歴史遺産」とする観点が再浮上したのである。

目下、このグローバル化の第2の動向は和歌山県国際交流協会、和歌山大学経済史文化史研究所および観光学部、南カリフォルニア大学、さらにはローカルな町役場の学芸員や私設博物館長など地域貢献を意図した地元と海外移住地の有識者たちに先導された形ではあるが、たとえばハワイ大学やハワイ・ホノルルの日本文化センターとの交流、アメリカ・南カリフォルニア所蔵資料の発掘、ブラジル県人会への訪問、オーストラリア・ブルームおよび木曜島の歴史資料館の訪問、和歌山県内でもカナダ・スティーブストンに渡った日高郡美浜町三尾地区カナダ移民資料館（アメリカ村）をはじめ、東牟婁郡太地町公民館および歴史史料室によるアメリカ・ロサンジェルス・サンピードロ（ターミナル島）を中心とした国内外の遺品および資料収集、串本町の真珠貝漁業に関する遺族や関係者からの収集資料によるパネル展や講演会の開催およびその常設館建設の決定、さらには和歌山大学と国際交流協会との共催による移民関係のシンポジウム開催や遺品展示会開催など、地域史に根差した国際社会における相互交流の深化と活性化を目指して新たに動き始めている。

### (3) ジェンダーの視点からの高齢者ライフストーリー分析

経済的な面ではグローバル化が進む日本の社会ではあるが、地理的要素や地域の特

表2 調査地におけるライフヒストリー調査対象者

性別	年齢	現住地	同居者	出身地	備考
①	f 81	奈良市	長男家族	奈良市	夫の仕事の手伝いや自分でも商売をいくつか手がけた。12年前夫死亡。
②	m 81	奈良市	妻	三重県I市	仕事の関係で大阪市内に勤務。退職前に奈良市内に家を購入。関西に長男・次男家族。
③	m 80	奈良市	なし	岡山県M市	2年前妻死亡。奈良市内に長女家族。
④	f 79	奈良市	長女家族	大阪府S市	家族の事情で幼少期は四国に住む。戦後大阪に出て働く。夫と離婚。
⑤	m 79	奈良市	なし	奈良県Y市	7年前妻死亡。身の回りのことは自分でしている。奈良市内に長男家族。
⑥	f 78	奈良市	夫	奈良県O町	外出は夫婦一緒に多い。奈良県Y市に長女家族。
⑦	m 76	奈良市	なし	奈良県Y町	20歳代半ばに出身地を離れ、東京や大阪、奈良で仕事に就く。
⑧	m 75	奈良市	妻	奈良県O町	奈良市内に長男・次男家族。
⑨	m 74	奈良市	妻	大分県B市	仕事の関係で大阪市内に勤務。結婚後奈良市内に。大阪市内に長男家族。京都府K市に次男家族。
⑩	f 70	奈良市	なし	奈良市内	昨年夫死亡。家庭の事情で幼少期から苦労。奈良市内に長男家族。
⑪	f 90	黒滝村	なし	福岡県H市	15年前夫死亡。隣家に親戚。
⑫	m 87	黒滝村	妻	黒滝村	隣家が長男宅。現在も車を運転。
⑬	m 79	黒滝村	妻	黒滝村	寺の住職を継ぐ。
⑭	m 88	十津川村	妻	十津川村	村内中心部に居住し不便はない。
⑮	m 83	十津川村	妻	十津川村	中学まではもともと奥の集落で生活したが大きな支障。長男が近所に住む。
⑯	f 76	十津川村	息子二人	十津川村	家族の事情で幼少期に苦労。買い物や病院へのバスが極めて少なく困る。
⑰	f 103	白浜町	長男夫婦	白浜町	公務員として長年勤務。現在はゲートボールを楽しむ。
⑱	m 93	白浜町	息子	白浜町	戦前は大阪府内で勤務。戦後白浜町に戻り建築業。
⑲	m 93	白浜町	妻 長男家族	白浜町	戦前は大阪府内で勤務。戦時中満州へ。戦後結婚して兵庫県内に住む。子ども2人は白浜町に在住。
⑳	f 86	白浜町	なし	白浜町	学校卒業後大阪市内へ働きに。子ども2人が白浜町在住。
㉑	m 86	白浜町	なし	白浜町	町内の幼なじみと結婚後に商店営む。
㉒	f 84	白浜町	なし	白浜町	夫の転勤で大阪市内に住む。定年後白浜町に戻る。
㉓	f 83	白浜町	夫	白浜町	夫は田辺市出身。白浜町内に次女。
㉔	f 81	白浜町	なし	田辺市	親光業で働くため白浜町に。結婚後は家事・育児。近所の一人くらしの女性たちと楽しい毎日。
㉕	f 79	白浜町	なし	白浜町	大阪府内と埼玉県に子ども居住。現在病院通いで健康に不安あり。
㉖	f 77	白浜町	なし	和歌山市	戦争疎開のため家族で白浜町に来る。町内徒歩圏内に子ども居住。
㉗	f 76	白浜町	夫	白浜町	隣家の知り合いと結婚。夫の自営業の手伝い。子ども2人が白浜町在住。
㉘	f 75	白浜町	なし	兵庫県	父親の仕事で白浜町へ。結婚後しばらく兵庫県内で生活。
㉙	f 75	白浜町	なし	広島県	夫と長男・次男は仕事の関係で大阪府内に在住。
㉚	m 72	白浜町	妻	白浜町	大阪市内に就職。兄弟が仕事で白浜町を離れたのを機に戻って結婚。

注) 性別欄のmは男性、fは女性を表す。個人データの公表についてはインフォーマントの了承を得ているが、個人が特定されないよう、表中の記載に配慮した。

(ライフヒストリー聞き取り調査により作成)

性といった地域間の差異が、高齢者個々の「生きられた世界」の構築に影響していることを検証するため、高齢者へのライフヒストリー聞き取り調査を、中山間地域で過疎化が進行している奈良県吉野郡黒滝村ならびに同県吉野郡十津川村、半農半漁の和歌山県西牟婁郡白浜町で実施した。なお、比較のため、大阪市の郊外地域として位置づけられる奈良市においても同様の聞き取り調査を実施した(表2)。

狭い谷や尾根沿いに小さな集落が点在する中山間地域の黒滝村と十津川村では、役場や病院のある村の中心部への交通アクセスすら十分とはいえない。そのため両村の居住者(①~⑯)にとって、自家用車の運転は日常生活に欠かせない。⑫は、現在も村内に限って車を運転する。⑪も78歳までは車を運転していた。恋愛結婚で黒滝村に来た⑪は、若い頃は辛いことがあると福岡県の実家に帰ろうと何度も思ったが、夫が亡くなってからは、村人の親切がありがたいと語った。

2011年の台風12号では、十津川村をはじめ黒滝村で村内の道路や村外に通じる国道が土砂崩れで寸断され、村民が孤立した。紀伊山地に位置する両村は過疎化と自然災害に脅かされてきた。1959年の「伊勢湾台風」

で隣家が土砂で埋まるのを間近で見た⑬は、大雨の度に不安はあるが、自分の代に廃寺にはできないという。

白浜町内でかつて運搬船の経営や半農半漁で生計を立てていた集落のインフォーマント⑰~⑳についてみると、大半は、若い頃に大阪方面に出て仕事に就いた経験のある人(⑱、⑲、⑳、㉑)で、子どもの頃に親世代の農/漁業の手伝いをした人がわずかにいる程度である(⑳、㉑)。これは、戦前から大阪方面への交通手段が確保されていたからだろう。結婚や退職を契機に、当該集落に戻る傾向がみられる。「お互い秘密にするようなことは何も無い」ほど、長年近づきあいをしているという。夫が亡くなった後一人暮らしになった女性たちが、親戚同様に互いの家を訪問したり、趣味の活動で繋がっていることに着目したい。

## 5. 主な発表論文等

### 【雑誌論文】(計6件)

①松本博之、(随想) フィールドが人を選ぶのか?、千里地理通信、65号、8、2011、査読無

②松本博之、海洋環境保全の人類学、松本博之編『海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会』、国立民族学博物館調査報告、97、3-19、2011、査読有

③松本博之、沿岸水域の海洋資源をめぐる先住民の窮状—オーストラリア・トレス海峡諸島のジュゴン鯨を事例として、松本博之編『海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会』、国立民族学博物館調査報告、97、169-193、2011、査読有

④松本博之・森本泉、海外フィールドワークをめぐる知の還元という課題、E-journal GEO、8、3-14、2013、査読有

⑤松本博之、オーストラリア熱帯海域における真珠貝漁業のSeascape—トレス、地理学報(大阪教育大学)、32、59-76、2013、査読無

⑥帯谷博明、花筏の浮かぶ風景—ある市民活動の物語、『月刊奈良』、50(6)、54-57、2010、査読無

### 【学会発表】(計15件)

①山田誠・高田将志・相馬秀廣ほか、河川の流下に伴う流域環境の変化—紀伊半島四河川の比較—、2012年日本地理学会春季学術大会、2012年3月28-29日、首都大学東京

②松本博之、オーストラリア・トレス海峡諸島民のジュゴン鯨とその窮状、2012年日本地理学会春季学術大会(招待講演)、2012年3月28日、首都大学東京

③松本博之、木曜島(トレス海峡)の真珠貝漁業の日々:昭和期を中心に、2011年和歌山県串本町教育委員会(招待講演)、2011年10月1日、串本町文化ホール

④西村雄一郎、日本におけるGISを用いた災

害情報共有の可能性と課題、歴史都市防災研究センター第40回京都歴史災害研究会、2011年7月11日、立命館大学

⑤ **Yuichiro NISHIMURA** and Toshikazu SETO, The Emergence of Neogeographers in the Great East Japan Earthquake 2011: Crisis Mapping Project Using Free and Open Source Software for Geospatial. The Association of American Geographers 2012 Annual Meeting, 2012, 2012年2月28日, New York, USA.

⑥ **松本博之**、和歌山県南部海外出稼ぎ者による真珠貝漁業一貝ボタンの故地木、奈良地理学会、2012年07月14日、奈良女子大学

⑦ **Nishimura, Y.**, OpenStreetMap and the heavy rainfall disaster in the mountainous area of Nara, Japan. State Of The Map 2012, 2012年09月06日, Tokyo, Japan

⑧ **西村雄一郎**、大学教育におけるOSM・FOSS4Gの活用と展開、関西G空間フォーラム in 奈良、2012年12月03日、春日野荘

⑨ **西村雄一郎**、大学教育とOSM、OpenStreetMap ワークショップ in 名古屋 #5、2013年01月13日、名古屋工業大学、愛知。

⑩ **西村雄一郎**、OpenStreetMap ってなに？オープンデータの魅力とその活用、DoChubu「つながるマップ」研究会、2013年03月01日、デジタルアースラボ、愛知

⑪ **内田忠賢**、都市民俗研究のゆくえ、京都民俗学会5月談話会、2012年05月29日、ウィングス京都

⑫ 山田誠・浜崎健児・熊木雅代・高村仁知・**高田将志**、和田恵次、紀伊半島における河川の水質と表層環境との関連性、2013年日本地理学会春季学術大会、2013年03月29日～30日、立正大学（埼玉県熊谷市）

⑬ 山田誠・浜崎健児・熊木雅代・高村仁知・**高田将志**、和田恵次、紀伊半島の河川水質分布とその要因に関する一考察、陸水物理研究会、2012年11月17日、三重大学

⑭ **YOSHIDA Yoko**, Lived world of elderly people in Japan: analyzing their life history (oral presentation). 32nd International Geographical Congress Cologne, 2012年8月29日, Cologne(Germany)

⑮ **帯谷博明**、水環境のガバナンスをめぐる現代的課題、京都民俗学会第29回年次大会・人文地理学会歴史地理研究部会合同シンポジウム『水辺の環境を考える——民俗学・地理学・社会学からの貢献』、2010年12月5日、キャンパスプラザ京都

#### 【図書】(計9件)

① **帯谷博明**、環境と観光、安村克己ほか編『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房、94-95、2011、査読無

② **帯谷博明**、流域社会、地域社会学会編『新版キーワード地域社会学』ハーベスト社、

364-365、2011、査読無

③ **松本博之** (翻刻者)、『(翻刻本) 瀧本庄太郎日記—トレス海峡・木曜島真珠貝漁業 (大正14年・大正15年・昭和3年・昭和4年・昭和5年版)』、奈良女子大学、309頁、2011、査読無

④ 井上俊ほか59名 (**帯谷博明**)、社会運動をめぐる文化、『文化社会学入門——テーマとツール』、ミネルヴァ書房、132-133、2011、査読無

⑤ **帯谷博明** (パクチャンゲン・キムジョンス訳・韓国語版)、『ダム建設をめぐる環境運動と地域発展』、インゴル(Ingle Publishing)、1-408、2011、査読無

⑥ **内田忠賢**ほか編、『都市と都市化』都市民俗基本論文集、岩田書院、622頁、2011、査読無

⑦ **内田忠賢** (編著)、『都市民俗生活誌文献目録』、岩田書院、224頁、2012、査読無

⑧ 現代風俗研究会 (編著) (**内田忠賢**)、『現代風俗 物見遊山・旅と娯楽の風俗学』、新宿書房、190頁、2012、査読有

⑨ **高田将志**・山田誠、春日山原始林とその周辺の地形・地質—森林の変化にかかわる要因は何か。前迫ゆり編『世界遺産 春日山原始林』ナカニシヤ出版所収、100-109、2013、査読無

#### 【その他】ホームページ

<http://www.nara-wu.ac.jp/bungaku/sges/database/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松本 博之 (MATSUMOTO HIROYUKI)

奈良女子大学・名誉教授

研究者番号：70116979

### (2) 研究分担者

内田 忠賢 (UCHIDA TADAYOSHI)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：00213439

高田 将志 (TAKADA MASASHI)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：60273827

吉田 容子 (YOSHIDA YOKO)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：70265198

帯谷 博明 (OBITANI HIROAKI)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：70366946

西村雄一郎 (NISHIMURA YUICHIRO)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：90390707

相馬秀廣 (HIDEHIRO SOHMA)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：90196999

### (3) 連携研究者：なし